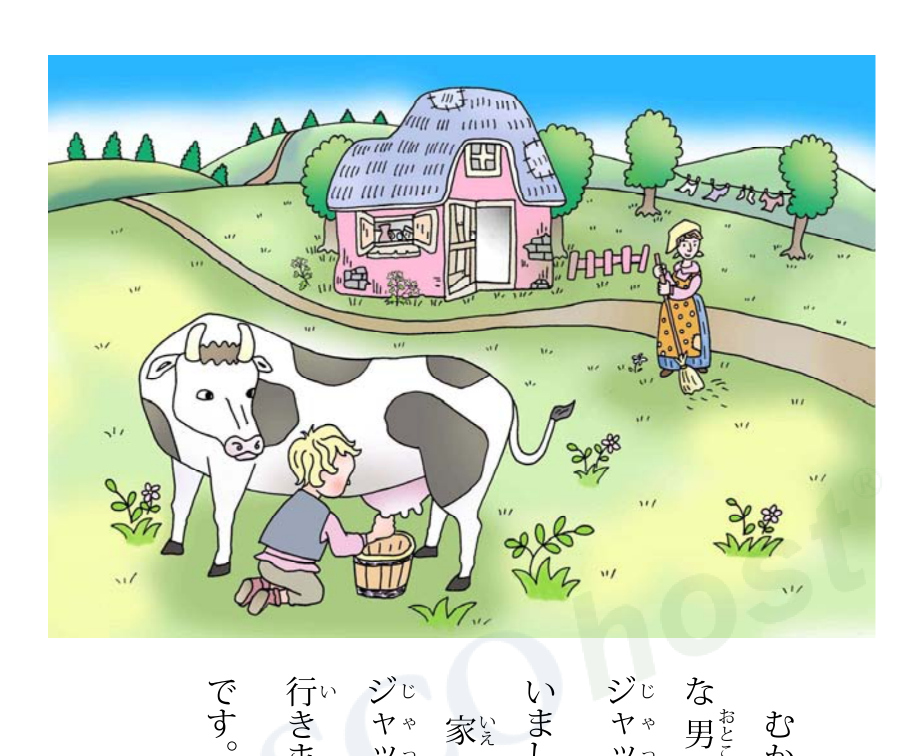
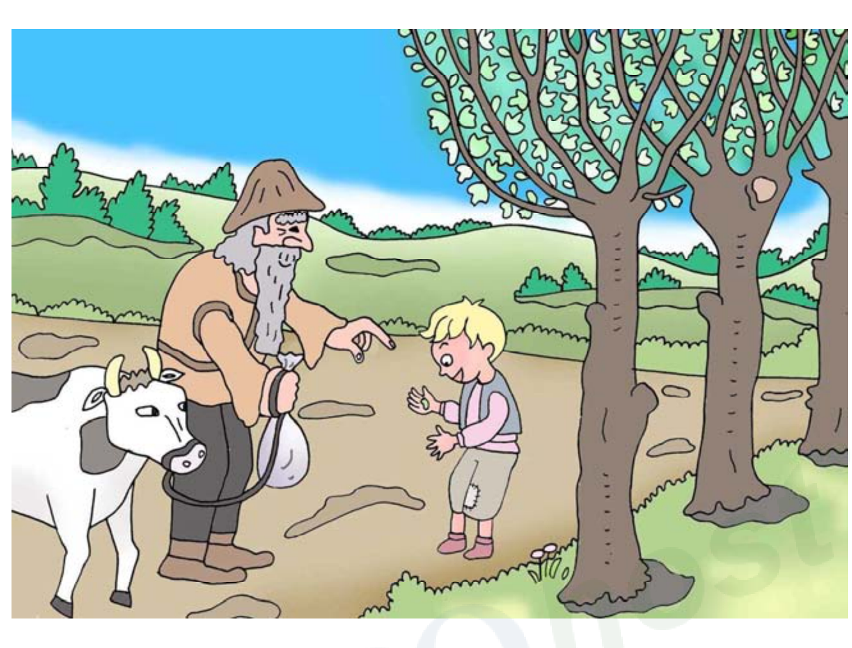


むかしむかし、あるところに、とても元気な男の子がいました。名前はジャックです。ジャックは、お母さんと二人で暮らしていました。

家にはお金がありませんでしたから、ジャックは毎朝、牛のミルクを町へ売りに行きました。ミルクを売って食べ物を買うのです。

でも、ある日、牛のミルクが出なくなりました。お母さんは言いました。
「困ったわ。もう、ミルクが出ない…。どうしましょう」
ジャックは言いました。
「じゃあ、お母さん、この牛を売りましょう」
ジャックは、牛を連れて町へ歩いていきました。
すると、一人のおじいさんに会いました。おじいさんは、右手に袋を持っていました。
「おじいさん、こんにちは！」
ジャックが元気に言うと、おじいさんは言いました。
「牛を連れてどこへ行くんだい？」
「町へ売りに行くんだよ」



「そうか…。その牛がほしいな。この豆を
あげるから」
「え？　でも…」
おじいさんは、右手の袋から豆を一つ
見せて言いました。
「これは『魔法の豆』だよ。この豆を
持っていると、お金持ちになることが
できるんだ」
「わあ！　魔法の豆！」
ジャックは豆を一つもらって、喜んで
家に帰りました。

お母さんは、ジャックに言いました。

「馬鹿！　馬鹿な子だね！　牛をあげて豆をもらった？
ジャックは馬鹿だよ」

「でも、これは、お金持ちになることができる魔法の
豆なんだよ」

「魔法？　お金持ち？　馬鹿だね！」

お母さんは、豆を窓の外に捨てました。





次の朝、ジャックが起きると、お母さんの捨てた豆が大きな木になっていました。その木は、とても高くて上のほうが見えませんでした。

ジャックはびっくりしました。

「あの豆は、本当に魔法の豆だったんだ！」

ジャックは、大きな豆の木を見て思いました。

――上まで登りたいなあ――

ジャックは、すぐに豆の木を登っていきました。

登っても登っても
一番上に着きません。
下を見ると、家が小さく
見えます。ジャックは、
また登りました。下を
見ても、もう家は見え
ません。

そして、一番上に
着きました。

ジャックが周りを見ると、花がたくさん咲いています。森が見えます。遠くに城も
見えます。

――あ、お城だ！――

ジャックは城のほうへ歩いていきました。そして、城に着くと、中に入っていきました。すると、女の人が出てきて言いました。

「まあ、あなた、どこから来たの？
ここは怖い大男の城よ。大男は子どもを食べるのよ。早く家に帰りなさい」

そのとき、大男の足音が聞こえてきました。

ドスン、ドスン



「大変だわ！　ここに入りなさい」
女の人は、ジャックを台所の大きな鍋の中へ入れました。

大男が台所へ入ってきました。手に三頭の牛を持っています。

「クン、クン。子どもの臭いだ」

「子どもの臭い？　子どもは、もういませんよ。子どもは、おととい食べたでしょう。今日は、その牛を食べましょう」

女の人はそう言って、牛を料理しました。

大男はその牛を手で持って一口で
食べました。
ジャックは、鍋の中からそれを見て、
びっくりしました。大男は、牛を全部
食べると、にわとりを持ってきてテーブル
に置きました。そして言いました。
「卵を産むんだ！」
すると、にわとりは金の卵を産みました。
大男が、また、
「卵！」
と言うと、にわとりは金の卵を産みました。



静かになったので、ジャックが鍋から見ると、大男は寝ていました。

――このにわとりがほしい！　お母さんにあげたいな――

ジャックは、にわとりを持って、急いで城を出ました。森の中を走って、豆の木を下りて家に帰りました。

お母さんは、金の卵を産むにわとりを見て、とても喜びました。

ジャックは、金の卵を売って食べ物や服を買いました。ジャックは、また豆の木に登りたくなりました。新しい服を着て帽子をかぶって豆の木に登っていきました。

城に着くと、女の人が出てきました。

「まあ、また子どもだ。だめだめ。帰りなさい。この前来た子どもが、にわとりをとっていったから、大男はとても怒っているんだよ」

それでも、ジャックは言いました。

「お腹がすいています。何かください。昨日から何も食べていないんです」

ジャックが何回も言いましたから、女の人は、ジャックを台所へ連れていきました。

すると、大男が帰ってきました。ジャックは急いで、また大きな鍋の中に入りました。

「クン、クン。子どもの臭いだ」

でも、女の人が「子どもはいない」と言いましたから、大男は、子どものことは忘れました。そして、晩ご飯をたくさん食べました。食べ終わると、隣の部屋から袋を二つ持ってきて、中のお金をテーブルの上に出しました。

「一枚、二枚、三枚…三百枚、三百一枚…

ああ、眠い…三百二枚、三百三枚…」

大男はお金を数えると、また袋の中に入れました。

グー、グー、グー



大きな音です。ジャックが鍋から静かに出ると、大男は寝ていました。ジャックはすぐにお金の袋をとって城を出ました。そして、重い袋を持って森の中を一生懸命走って、豆の木を下りて家に帰りました。お金の袋を見て、お母さんは、とても喜びました。



また、ジャックは、城へ行きたくなりました。新しい服を着て、豆の木を登って大男の城に行きました。

女の人は「帰りなさい」と言いましたが、大男が帰ってきましたから、急いでジャックを台所へ連れていきました。ジャックが台所の鍋の中に入ると、大男は言いました。



「クン、クン。子どもの臭いだ」
「子どもはいませんよ」
女の人が言いましたから、大男は子どものことを忘れました。そして、晩ご飯をたくさん食べてから、きれいなハープを持ってきました。
「歌を歌ってくれ！」
大男が言うと、ハープはきれいな音で歌を歌い始めました。大男はそれを聞きながら寝ました。

ジャックは鍋から出てきて、ハープを持って走りました。

すると、そのときです。

「ご主人さま、ご主人さま」
ジャックの持っているハープが大きな声を出しました。
「大変です！　起きてください。起きてください」
大男は起きました。そしてジャックを見て言いました。
「あ！　おまえは、お金と、にわとりをとった子どもだな！」
ジャックは、大声を出しているハープを持って、一生懸命走りました。





ドスン、ドスン、ドスン、ドスン

大きな足音を立てながら、大男が
ジャックの後ろを走ってきます。
ジャックは大急ぎで豆の木を下りて、
お母さんに言いました。
「早く、早く！　斧を持ってきて！」
お母さんは、斧を持ってきました。
上を見ると、大男が豆の木を下りて
きます。

ジャックは大急ぎで、豆の木を斧で切りました。木がゆっくり倒れて…

「あーっ！」

大男が、大きな声を出しました。

ドッスーン

大男は、高い空の上から落ちて死にました。それからジャックは、お母さんと楽しく暮らしました。